



祝平一、「疫病、文本與社會：清代痧症的建構」、
翻訳（1）：
痧とは、どのような疾病だったのだろうか

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池内, 早紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004270

祝平一、「疫病、文本與社會：清代痧症的建構」、翻譯 (1)

一痧とは、どのような疾病だったのだろうか—

池 内 早紀子

はじめに

「痧」といわれるものは、一体どんな疾病もしくは症状なのだろうか。『漢方用語大辞典』¹に「痧」²は、「①病証名。痧脹、痧氣ともいう。なお、痧筋・痧塊・暑痧・瘟痧・烏痧・紅痧・攪腸痧・抽筋痧・吊脚痧・疫痧の各項を参照」「②証名。皮膚上に、粟米大で中に清水をもつ赤いできもの。『臨床指南医案』「痧は、疹の通称にして、頭ある粒で粟の如し。」と説明されている。また『漢方用語大辞典』に「痧脹」は、「病証名。痧、痧氣ともいう。夏秋に風寒暑湿の氣あるいは疫氣・穢濁の邪を感受して身体寒熱、頭、腹が、悶え脹り痛み、意識障害、喉痛あるいは吐瀉、腰部の圧迫感、指甲の青黒色、あるいは手足の強直、麻木などをあらわす。痧氣により胃腸が閉塞され、経絡が壅塞されることから痧脹と名づけられた。痧毒が気分にあるものはこれを刮し、血分にあるものはこれを刺して瀉血する、皮膚にあるものはこれを焮し、痧毒が臟腑に入るものはこ

1 訳者注。創医学会術部、『漢方用語大辞典』第二版、燎原、1984年

2 訳者注。「痧」は、『簡明中医辞典』中国中医薬出版社、2001年に、「痧①病証名。見『世医得效方』。又名痧氣、痧脹。詳見痧脹条。參見痧筋、痧塊、暑痧、瘟痧、斑痧、烏痧、紅痧、攪腸痧、抽筋痧、吊脚痧、疫痧条。②証名。指皮膚出現紅点如粟、以指循皮膚、稍有阻礙的疹点。清・邵新甫在『臨床指南医案』按語中說。「痧者、疹之通称、有頭粒如粟」。參見斑疹条。」とある。『漢方用語大辞典』はこの文章の引用であろう。また『中医大辞典』には、「病名。①指感触穢濁不正之氣而出現腹痛、吐瀉等證。多見夏秋二季。『痧脹玉衡』卷上。「痧證先吐瀉而心腹絞痛者、從穢氣痧發者多。先心腹絞痛而吐瀉者、從暑氣痧發者多。心胸昏悶、痰涎膠結、從傷暑伏熱痧發者多。遍身腫脹、疼痛難忍、四肢不舉、舌強不言、從寒氣冰伏過時、鬱為火毒而發痧者多。」『急救痧證全集』卷上。「痧者、厲氣也、入氣分則作腫作脹、入血分則為蓄為痧、遇食積痰火則氣阻血滯、最忌熱湯熱酒。』『古方選注』。「痧者、寒熱之湿氣、皆可以為患、或四時寒湿、凝滯於脈絡。或夏日湿熱、鬱遏於經隧。或鼻聞臭氣、而阻逆經氣。或內因停積、而壅塞府氣、則胃脘氣逆、皆能脹滿作痛、甚至昏憤欲死。』『痧證全書、論痧』。「古無痧字……惟霍乱条下有不吐瀉而腹絞痛者、曰乾霍乱、亦名絞腸痧、緣南方体氣不實之人、偶触糞土沙穢之氣、多腹痛悶乱、名之曰痧、即沙字之訛也。」外治用刮法、刺法、推拿法、内服平安散、武侯行軍散、散痧湯等。痧証有熱痧、寒痧、暑痧、瘟痧、陽痧、陰痧、絞腸痧等、參見各該条。②即疹。『臨床指南医案』邵新甫按。「痧者、疹之通称、有頭粒而如粟象、癩者、即疹之屬、腫而易癢。」とある。

れを蕩滌攻逐するによい。痧に補法はなく、総じて開泄攻邪の法を主とする。」と中医研究院『簡明中医辞典』³を引き説明し、ここに「『痧脹玉衡』参照」と付け加えている。これらより「痧」は『痧脹玉衡』という書物に関わりが深いことは読み取れるが、いったいどの様な病気なのか、明確にはわからない。

江戸期に著された「痧」の専門書、解説書は多くはないが存在する。その一書である児島宗説『痧脹晰義』⁴には治験例を記載している。ただしその治療の対象は、現代の我々から見れば決まった一つの疾病を「痧」と呼んでいるようには思えない。ところが、孫にあたる加賀山翼の『痧病新書』は、明らかに江戸末期に流行したコレラの治療を目的とする⁵。中国医書に由来する「痧」の概念は、日本において明確に理解することができなかったのだろうか。それとも他の理由があったのだろうか。いずれにしても、本家である中国ではどうだったのか。

台湾で出版された『中國史新論／醫療史分冊』に掲載されている祝平一の論文、「疫病、文本与社会：清代痧症的建構」は、この疑問にヒントを与えてくれると考える。さらには、中国伝統医学と呼ばれるものの成立プロセスを垣間見ることができるかも知れない。そこで2回に分けてこの論文を日本語訳としてみたいと思う。

凡例

- ①祝平一、「疫病、文本與社會：清代痧症的建構」、『中國史新論／醫療史分冊』、聯經出版事業股份有限公司、2015年、pp.387-430を翻訳したものである。またこの原著は、「清代的、痧——一個疾病病範疇誕生——」として、『漢学研究』31.3、2013年、pp.193-228に発表されたものを補筆したものである。
- ②論文全文は、一章 引言、二章 文本及其指稱功能、三章 痧之為疾：指稱與實體、四章 痧為疾乎？、五章 結語からなる。一、二章を、翻訳(1)とした。三、四、五章は、翻訳(2)として翻訳する予定である。

3 訳者注。「痧脹」は、『簡明中医辞典』に「病証名。又名痧。見『痧脹玉衡、痧脹』。指夏秋之間、因感受疫氣、穢濁、而見身體寒熱、頭、胸、腹或悶或脹或痛、或神昏喉痛、或上吐下瀉、或腰如帶束、或指甲青黑、或手足直硬麻木等一類病證。因痧氣脹塞胃腸、壅阻經絡、故名痧脹。痧毒在氣分者刮之。在血分者刺（放血）之。在皮膚者焮之。痧毒入臟腑者、宜蕩滌攻逐之。痧無補法、總以開泄攻邪為主。參見痧證各條。」とある。

4 訳者注。池内早紀子、「児島宗説『痧脹晰義』翻字・全訳註」、『人文学論集』36、2018年、pp.73-194

5 訳者注。池内早紀子、「「新出の刺絡専門書『痧脹晰義』について」の続報」、『日本医史学雑誌』64(2)、2018年

- ③古典籍からの引用文は、正字とした。これらの引用文については、訳者が、通行の文字を用い書き下し文とし、() 内に現代語訳を添えた。
- ④脚注において、原注はそのまま訳し、訳者による注釈は、「訳者注。」とした。
- ⑤注釈に引用した文等の簡体字は通行の文字に改めた。

祝平一、「疫病、文本與社會：清代痧症的建構（疫病、テキストと、社會：清代における痧症の構築）」翻譯 祝平一⁶ (1)

一章、はじめに

台湾で現在行われている刮痧は、一般に、中暑⁷（熱中症）、背中の痛み、または軽度の風邪を治療するために用いられている。刮痧は、通常、皮膚の上に内出血の青あざを残し、気血の流れを促す効果がある。巷に、出まわっている刮痧の書籍では、極端なものでは、これを健康長寿の方法と見なしている。

しかし、私たちには、想像し難いが、中国の歴史において、刮は主に皮膚の疹子（発疹・麻疹）を治療するために使用されていた。宋以前において、「痧」は「沙」（砂）と書かれ虫がひきおこす病気であった。その症状は、通常皮膚に砂のような発疹がおり、治療法は虫をこすり落とすことであり、これがまた後に刮痧の起源となった⁸。

宋から明代にかけて、「痧」の文字は次第に「沙」（砂）という言葉に取って代わった。一部の明代の医家は、痧と虫が関連するという古い概念に留まっていたが、一方ある医家たちは瘴氣と関連する、つまり中国南部で発生する病気であると見なしていた。

6 中央研究院歴史語言研究所研究員。

本文の原題は「清代的、痧——個疾病病範疇誕生—」として、『漢学研究』31.3、2013年、pp.193-228に発表。これを増補した。痧脹に関するテキストの多くは、著名な医学者が書いたものではない。内容は似通っていて重複しているが、ほとんどが中国の大図書館の善本室に所蔵される。時間に限りがあり、版権も複雑なため、詳細な検討を加えることが出来なかった、その失は免れない、是非、訂正を頂きたい。

7 訳者注。「中暑」は、『三因極一病證方論』中暑論に「夫暑、在天爲熱、在地爲火、在人爲心、故暑喜歸心。中之、使人噎悶、昏不知人。入肝、則眩暈頑癩、入脾、則昏睡不覺、入肺、則喘滿痿、入腎、則消渴利小便。」とある。『漢方用語大辞典』には、「夏期の炎天下、暑邪に、感じて発する急性病証。中喝ともいう。症状として、突然昏倒し、身熱煩燥し、気喘して話すことができず、牙関緊あるいは口が開き歯がかわき、大汗あるいは無汗、脈虚数、あるいは昏迷して醒めず、四肢抽搐する。治療は涼しい所に移し、清暑・解熱・開竅の剤を投与し、さらに針灸・刮痧などの法を併用する。」とある。

8 紀征瀚、「古代「痧」及治法考」、中国中医科学院中医医史文献研究所博士論文、2008年、pp.32-55。

また子供の疹⁹や痘¹⁰が出ることを痧と呼ぶ地域もある。王肯堂¹¹は次のように述べている。「麻疹は浮くこと小しくして頭粒有り。隨^{まま}に出^{ただち}で即^{おさ}に收む。膿疱を結ばず。北人之を糖瘡(糠瘡)と謂い、南人之を麩瘡と謂い、吳人之を痧と謂い、越人之を瘡と謂う。古に謂う所の麻なり。聞人氏謂う所の膚疹、是れなり。(麻疹は小さく浮きでて先は粒状であり、出てはおさまる、濃瘡にはならない。北方の人は糖瘡(糠瘡)¹²といい、南方の人は麩瘡といい、吳の人は痧といい、越の人は瘡^{いん}という。古くは麻といった。聞人氏¹³のいわゆる膚疹^{しん}である)」¹⁴¹⁵地域により言い方が異なるため、明代には、痧や砂に関連した新しい名前が多数現れたが、これに関する専門書はまだ出現しなかった¹⁶。明代、「痧」という名でこれを論じた書物は、すべて痘疹に関連し、幼科¹⁷に分類される。俞茂鯤¹⁸『痧痘集解』¹⁹

9 訳者注。疹。『漢方用語大辞典』に「証名。疹子ともいう。温熱病の発疹をさす。風熱が肺を鬱し、内は営分を閉じ、血絡より外に出ることによっておこる。皮膚上に紅色の小点を発し、形は粟米の様で、これをなでると手にふれる。疹色が鮮紅あるいは、紫赤のものは、熱が盛んで、紫黒のものは、毒が重い。発熱煩燥・咳嗽胸悶・口渴・舌幹色などの証をともなう。」

10 訳者注。痘。『漢方用語大辞典』に「痘瘡に同じ。」また「痘瘡」は「天花ともいう。天然痘のこと。」

11 訳者注。王肯堂。『中国医学史レファレンス辞典』に、「(1549~1613年)明の著名な医学者。字は宇泰、号は損庵、自ら念西居士と号す。金壇(江蘇省金壇県)の人。翰林院檢討などの官職を歴任。和寇対策に関する上書により降格処分になり、病気を理由に故郷に帰った。免職後は故郷で医学を研究し、病人を治療し有名になった。医書を広く読み、自分の臨証経験と合わせ、長年資料を収集し、11年かけて『証治準繩』44巻を編纂。雑病・類方・傷寒・外・児・婦など六科に分類したので『六科証治準繩』ともいう。同書は内容が豊富で、理路整然とし、証を以て治を論じたものが多く、立論も平易であったので、広く普及した。ほかに『鬱岡齋筆塵』『医論』『医弁』の著書があるほか、『古今医統正脈全書』を編輯し、中国医学古代文献の整理と保存に大きな貢献をした。また、マテオ・リッチなど西洋の宣教師と交流し学術討論した。『明史』巻221とあり、また『江南通志』に「王肯堂、字宇泰、金壇人。都御史樵子、萬曆己丑進士、授檢討、仕至福建叅政。生平好讀書、著述甚富、於經傳多所發明。有『論語義府』『尚書要旨』『律例箋釋』『鬱岡齋筆塵』。尤精醫理、著『醫科證治準繩』等書、盛行於世。工書法、輯『鬱岡齋法帖』數十卷。手自鈎搨、為一時石刻冠」とある。

12 訳者注。糖瘡。王肯堂、『証治準繩』では、「糠瘡」となっている。後の注を参照。

13 訳者注。聞人氏。聞人規『聞人氏痘疹論』1232年。巻一「有正瘡痘有膚疹者何」で「瘡痘」と「膚疹」について述べる。三井駿一、「麻疹」名義考、『日本医史学雑誌』29(2)、1983年に「聞人規は『痘疹論』(1232)で、痘瘡を「瘡痘」、麻疹を「膚疹」と呼ぶ」という。

14 王肯堂、『証治準繩』、『王肯堂医学全書』、北京、中国中医薬出版社、1999年、p1760収載。

15 訳者注。明、王肯堂、『証治準繩』巻八十八、幼科、麻疹、「麻疹浮小而有頭粒、隨出即收、不結膿疱、北人謂之糠瘡、南人謂之麩瘡、吳人謂之痧、越人謂之瘡、古所謂麻、聞人氏所謂膚疹是也」

16 紀征瀚、『古代「痧」及治法考』、博士論文、中国中医科学院、2008年、pp.56-69。

17 訳者注。幼科。(中医)小児科。

18 訳者注。俞茂鯤。『中国医学史レファレンス辞典』に「清の医学者。字は天池。句曲(江蘇省句容市)の人。著書の『痘科金鏡賦集解』(1727年刻行)は、中国で種痘術について詳しく記した早期の文献。「熟苗」を用いることを主張し、痘苗の伝播は代を重ねるほどよとして、「敗苗」(痘瘡苗のこと)の採用に反対した。その種痘に関する記述や主張には科学性がある。」

19 訳者注。『痧痘集解』。「痧痘集解六巻(1727)」「中国古医籍書目提要」p.1131を参照。

病」を「^{かいえき}解休」に改めた。しかし、清代の魏之琇^{ぎししゅう}²⁹（1722-1772）は、『名医類案』中に案語を附して江瓘を批判する。「『内経』の「解休」を沙証と為すは誤解なり。標題に云う「解休」、今之を訂正す（『内経』の「解休」を沙証とするのは間違いである。表題にある「解休」を訂正する）³⁰『名医類案』の変更された表題が、再び元に戻された。これのみならず、魏はまた、江瓘が誤って、葉氏の原文を変更していると指摘し、『医説』によりさらに訂正を加える^{31 32}。葉氏は、「沙症」は以前の医師が論じていなかった、江南では流行する新しい病気であると考えていた。当時、一般の人々はすでに艾灸（灸）を用いて痧を治療しており、また後世の「沙を得る」という概念もあった。ただし葉氏は、灸による効果を認めてはいなかった。

にもかかわらず、明代の江瓘は沙が新たな病気の種類であることを認めないばかりか、沙症の存在すら認めない。逆に古典医学にもどって、ぴったりと合うような病気の名を探し、そのために葉氏の原文を変えた。

魏之琇はまた、沙症の項目の最後に杭世駿^{こうせいしゅん}³³（1695-1772）の考証をつけ加え、論拠を強める。「魏玉横³⁴に与えて解休を論じる書」で、杭氏は『内経』の「解休」は身体の疲労状態の説明であって、病名ではないと指摘している³⁵。彼もまた江瓘が沙を「解休」と改めたことを非難して、「別項目とするのは独断極まりない³⁶」という。かれは合わせて自分の経験により説明して述べる。「発痧、余嘗て此病有り、発すれば必ず神思躁擾し、少腹痛む。『靈』『素』未だ嘗て言い及ばず。時に小小、患苦するのみ、解休の義と毫かも干渉らず（私は以前、発痧に罹っていた、発症すると必ず精神状態はイライラと落ち着かず、少腹³⁷が痛んだ。『靈』、『素』³⁸では言及されていない。時折、ほんの少

29 訳者注。魏之琇。『中国医学史レファレンス辞典』に、「(1722～1772年) 清の医学者。字は玉璜、別号は柳洲。浙江杭州（浙江省杭州市）の人。医師の家柄の出身。江瓘の『名医類案』は不十分であると考え、『続名医類案』を編纂。明以降の資料を多く補充し、内容が豊富。ほかに『柳洲医話』を著した」

30 訳者注。原文は「誤解『内経』「解休」為「沙証」。標題云「解休」、今訂正之。」『名医類案』巻一「沙」に「琇按原本悞解内経解休為沙証標題云解休今訂正之」とある。

31 江瓘、『名医類案』、台北、宏業書局、1993年、p.46。

32 訳者注。『名医類案』巻一「痧病」の注に「琇按張呆醫說采葉氏錄驗方本文祇沙病二字江氏悞標沙症為解休遂妄改葉方原文云俗名發沙之症以附會之今據醫說訂正」とある。

33 訳者注。杭世駿。『中国人名大辞典』に「仁和人。字、大宗。号、堇浦。雍正举人。乾隆初召鴻博。授編修。校勘武英殿十三經二十四史。纂修三礼義疏。……」

34 訳者注。魏玉横。魏之琇の別名。

35 訳者注。『名医類案』巻一「痧病」の解説の最後に「與魏玉横論解休書、杭世駿」「解休二字不見他書解即懈休音亦倦而支節不能……」とある。

36 訳者注。『名医類案』巻一の原文は、「另列一門、武斷極矣」

37 訳者注。少腹（小腹）は、下腹部。

38 訳者注。『靈』は、『黄帝内経靈枢』。『素』は、『黄帝内経素問』。

し痛むだけである。解休の意味とは微塵も関係ない)³⁹ (下線は祝平一による) と述べる。彼はまた、魏之琇がすでに編纂していた『続名医類案』に対し痧病の項目は削除すべきだと意見を述べた⁴⁰。杭氏は、一方では魏之琇の説に賛成し「痧は、医経に見られない病名であると思うが、自分自身の経験にもとづけば、痧病の存在は確かである」というが、また一方では、「痧は軽症疾患で、別に一項目を設けるには不十分である」⁴¹といている。魏之琇と杭世駿の議論は清代の人が痧を一つの新しい疾病のカテゴリーとみなしていたことを肯定はするが、その重要性は議論の余地があったことが見て取れる。江瓘と魏之琇の痧症に対する認知態度の変化は、まさに清朝初期以降の痧に関する文献の蓄積の影響である。

清代の痧症を扱うには、やっかいな問題に直面しなければならない。痧の名称は、清代以前にすでに存在していた。それでは清代の痧症は、前代の痧の概念を継承したものなのか。そうだとすれば、なぜそれは清代になって初めて痧に関連する多くの文章が現れたのか、疫病（流行性伝染病）と密接に関連して、痧が新疾患かどうかの論争が起きたのか。研究者がこの問題について精査せず、痧は古くからすでにあったという見解に固執すれば、痧の歴史的变化やこの種の医学史におけるかなり周縁的な課題が、導き出すであろう考察を見落とすだろう。

一般的に言えば、疾病史の取扱いにはいくつかの方法がある。一つは、歴代の診断を遡って、古代の疾病が現在の何病に相当するのかを考察する^{42 43}。比較的特殊な症状を示すものについて、比較の見分けやすい麻瘋⁴⁴のような疾病については、この種の研究方式がうまくいくだろう⁴⁵。しかし、この方法を、清代の痧症に用いるのはかなり難しい。なぜなら清代の痧症は単一の疾病ではなく、一つのカテゴリーであるからだ。医学書に記載されている痧の症状は相当複雑だというだけではなく、現代人が異なった疾病として呼んでいるものが数多く混ざっている。もう一つは、文献考証を行うことによって痧

39 訳者注。『名医類案』巻一の原文は「發痧余嘗有此病、發必神思躁擾、少腹痛。靈素未嘗言及。時小小患苦耳、與解休之義毫不干涉」

40 江瓘、『名医類案』、p.47。

41 訳者注。『名医類案』巻一に、「解休休不可指名非百病中有此一症也」

42 李尚仁、「欧洲擴張与生態決定論：大衛阿諾論環境史」、『当代』、170、2001年、pp.18-29のコメントに見られる。

43 訳者注。『欧洲擴張与生態決定論：大衛阿諾論環境史』は、デイヴィッド アーノルド『環境と人間の歴史—自然、文化、ヨーロッパの世界的擴張』。

44 訳者注。麻瘋。ハンセン病。

45 Angela Ki Che Leung (梁其姿), *Leprosy in China: A History* (New York: Columbia University Press, 2009)

の歴史の源流を明らかにすることである。研究者は通常、関連文献を収集するが、歴史的・社会的分析を欠いている。安易に、ある種の疾病を継続した一つのものとしてみなし、特定の時空間でもっていた特殊性を無視しがちである⁴⁶。この他、マクロ的疾病史の分析は、よくある研究方法である。ある疾病がいかに社会と環境と共に変化し相互作用をもたらしたかを理解しようとする⁴⁷。この種の研究では、多くの疾病の種類、分布と病気に対する社会的反応の資料が収集されるが、病気そのものの問題について書かれることは少なく、常に現代の疾病の分類でもって歴史上の疾病を論じようとする⁴⁸。

本論では、チャールズ・ローゼンバーグの「疾病の構築 (framing disease)」の概念を用い、清代の人々が痧疫にどのように対処したかを論じる。ローゼンバーグは、人々がある種の疾病を扱おうとするには、必ずまず疾病に名をつけなければならない。その後やっと疾病が人々に認識され、これが防疫活動を動員する仲介になると考える⁴⁹。疾病が名づけられる前は、議論の対象とならず、医療関係者や医療政策に干渉のしようもない。この疾病は存在しないとさえも言えよう。しかしながら、いったん名がつけられると、この病気は、すぐさま実体化し様々な社会的構成員および体制と相互に作用する。

この中範囲の理論 (middle range theory)⁵⁰は、医師と患者が病気だと認知する2つ

46 如張綱、『中医百病名源考』、北京、人民衛生出版社、1997年、pp.98-102。

47 余新忠、『清代江南の瘟疫与社会：一項医療社会史的研究』、北京、中国人民大学出版社、2003年、pp.96-100。余氏は、清代の痧の意味は広い意味を持ち、一定の共通性をもつものの、明確なものではなく、一種類の疾病を指すものではないと指摘する。この点は本論と同じ立場である。ただし、余氏は痧が、現在の多分どの疾病に相当するののかと追求しようとする。しかし本論にこの意図はない。他に、余新忠、『瘟疫下的社会拯救：中国近世重大疫情与社会反应研究』、北京、中国書店、2004年。曹樹基、李玉尚著、『鼠疫、戦争与和平、中国的環境与社会変遷 (1230-1960年)』、済南市、山東画報出版社、2006年。

48 参克尼爾著、楊玉齡訳、『痘疫与人：伝染病对人类歴史的衝擊』(Plagues and Peoples)、台北、時報出版社、1998年(原著、William H. McNeill, Plagues and Peoples, 1976。邦題、ウィリアム・H. マクニール、『疫病と世界史』)。Camey T. Fisher (費克光)、「中国歴史上的鼠疫」、劉翠溶、伊懋可主編、『積漸所至：中国環境史論文集(下)』、台北、中研院經濟所、1995年、pp.673-646。Kerrie MacPherson (程愷礼)、「霍乱在中国 (1820-1930)：伝染病国際化的一面」、劉翠容、伊懋可主編、『積漸所至：中国環境史論文集(下)』、台北市、中研院經濟所、1995年、pp.747-796。壳德・戴蒙著、王道還、廖月娟訳『槍炮、病菌与鋼鉄：人類社会的命運 (Guns, Germs, and Steel)』、台北、時報出版社、1998年(原著、 Jared Diamond, *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies*, 邦題、ジャレド・ダイヤモンド、『銃・病原菌・鉄』)。

49 Charles Rosenberg, "Framing Disease: Illness, Society and History". In *Explaining Epidemics and Other Studies in the History of Medicine* (Cambridge; New York: Cambridge University Press, 1992), pp.305-318.

50 訳者注。中範囲の理論 (ミドルレンジ理論) は、Robert K. Mertonによって開発された。理論と経験的研究を統合することを目指した社会学的理論化へのアプローチである。

のプロセスに目を配ることができ、特定の疾病と社会の相互作用をより具体的に論じることができる。その疾病を直感的に古来からある病だと同定することを避け、そして人々が議論したり疫病を制圧しようとする具体的なプロセスを重視することができる。とりわけ痧のようにあいまいな疾病のカテゴリーに用いるには、「疾病の構築 (framing disease)」の研究方法がより効果的であるように思われる。

疾病の誕生は、複雑な社会プロセスと技術の運用に関連する。本論では、清代に出現した痧に関連する専門的な論述に重点をおき、「疾病の構築」のプロセスの中で、そのテキストが発揮している定義づけの役目を示していきたい。清代において、新しい「痧」のカテゴリーを用い、新しい疾病を呼ぶ必要があった。またこの新しい疾病が加わることは、従来の医学体系の様々なカテゴリーの関係を壊してしまうことだという医者もいた。その一方で、伝統的な医学知識により十分対処でき、別に痧の項目を作る必要はないと考える医者もいた。「痧」は医者が疾病現象に直面し、治療方法について考え、医学論争を行ううちに、テキストが生産され、さらにそれが再生産された。それにより、温病、麻、痘疹、霍乱などから分かれて、まだ境界のはっきりしない領域のカテゴリーが形成された。幾重にも重なったテキストと医者たちの論争で、中国医学知識と医療実践の多元的で複雑な階層構造ができあがった。痧症、この周縁的な疾病の誕生は、まさしくあまり論じられることが少なかった医史学の一面を垣間見せてくれる。

ところで、清代の痧に関わった医者が残した新しい論文の伝統と記述は、既存の古いテキストや概念と混ざり合い、痧を曖昧とした様相の疾病としてしまっている。新しい事物を呼称するために古い語彙を借用することは、中国医学では珍しいことではない。例えば風、麻瘋、痰、癩の錯綜する複雑な関係⁵¹、清代の温病、瘟疫、傷寒が引き起こした論争、これらはすべてその顕著な例である⁵²。ただ、これはまた知識論の問題を提起する。例えば、痧は昔から既存のものか否か、それとも新しい疾病なのか、どのようにして疾病の実体を確定するか、どのようにして治療するか、新旧いずれの方法を用いるのか、などなど。中国は広く、歴史も長く、各地の言葉も多様である。社会全体がこの疾病の定義を統一する前に、病名の統一を求めることは、木に縁りて魚を求むようなものである。疾病の定義が曖昧なままに、いかにして疾病史を研究するのだろうか、それは医史学研究者に対する挑戦である。本論の主旨は、以下の通りである。清代の医者

51 Angela Ki Che Leung, *Leprosy in China*, Columbia University Press, 2009.

52 Chao Yuan_ling, *Medicine and Society in Late Imperial China: A Study of Physicians in Suzhou, 1600-1850*, New York, Peter Lang, 2009, pp.79-101. Marta E. Hanson, *Speaking of Epidemics in Chinese Medicine*, London, Routledge, 2011, pp.91-103.

が、いかに新しい疾病のカテゴリーを確立し、痧の治療技術を作り上げたかを検討する。それにより、清代の医者や医学テキストと、清代の社会が疾疫に対応した方法との間にある複雑に入り組んだ関係を探るものである。

二章、テキストおよび定義の効能

痧を論じる専門書がはじめて現れたのは清初、郭志邃『痧脹玉衡』⁵³である。この書は康熙十三年（1674）の成書であり、1675と1678年の二種類の序文をもつ刊本が存在する。現在ほぼ確定できるのは、1675年の初刻本は三巻からなり、1678年の刻本は、後巻、「続叙」、「後記」⁵⁴が加わっているということである。他に確認されている中国中医研究所所蔵の『秘伝痧脹玉衡』によると、後巻には、他にこの書の校閲に加わった郭氏の地元の人々の名簿がある。郭志邃は、若いときに経学を学び、清になった後、転じて医学を学んだ。彼は自ら以下のように述べる。

余が高曾 經術を以て家を起し、箕裘累葉。余少くして宮墻に列し、…慨然として生民を
 恫恤するの志し有り。…因りて徧く仲景、東垣、丹溪諸先生の論を閲す。而れども帖括
 に拘られ、懷未だ展びざること有り。鼎革以後、播遷一ならず。…毎に憶う昔年 章を尋
 ね句を摘む、一身を淹塞するに過ぎず、毫も世に裨益すること無し。既にして江淮に旅食
 し、吳越を浪遊し、在る所痧脹の時行し、禍を被るもの少なからず。余が心惻然とし、一
 術を得て以て之を濟わんことを思う。…後攜李に返掉し、高曾遺す所の前賢の諸秘草を搜
 り求め、其の傳變 治し難き異症有れば、或は濂洛の大儒に定め、或は諸を楚粵の高士に
 議す。篇頁零星、各同異有りと雖ども、皆な『靈』、『素』、『甲乙』諸經に透參して、以て

53 訳者注。『痧脹玉衡』は、『中国医学史レファレンス辞典』に、「書名。3巻。清の郭志邃、1675年撰。痧脹は一度に多くの患者が出るうえ、伝染や変症の速度が速いため、適切に治療しないと、たちまち死に至ることから、先人の学術経験を採集し、その大綱を整理し、要点をまとめた。上巻は痧脹の啓蒙論・痧脹に関する重要語・痧脹の脈法を列記。中巻と下巻は、実際の治療例を交えながら各種痧症について述べ、巻末に備用要方を付す。同書の完成から3年を経て、郭氏は臨床の実践を通じて「痧の変幻、更に別病中に隠伏する者有り」（続序）と気づき、さらに後巻1巻を著して痧症の診療に関する多くの内容を補足。系統的にまとめられた痧症の専門書。ただ、臨床での状態別に細かく分類するあまり、名目がかなり繁多なほか、病因や証候などの解釈の面では、牽強で事実と即さない見解もままある。多くの刊本があり、建国後には排印本が刊行された」『痧脹玉衡』は、京都大学図書館所蔵『富士川文庫』、早稲田大学図書館所蔵、京都府立医科大学所蔵のものが、インターネット公開されている。

54 『中国中医古籍総目』には、「『痧脹玉衡』1675年の書業堂刻本四巻」と有る。

仲景先生の意を推し廣む、惜しむらくは專籍の傳う無く、沈埋日久しくして、古人の精
秘尚を未だ出でざるなり。余は日夕究心し、始て痧脹の變端を悟り、其の大綱を總べ、其
の要領を撮み、遂に歴歴たる措施を得て、響驗せざる無し。…故に余遺言を獲ると雖ど
も、尤も必ず子累黍の度に酌量して、其の治法を神明にす。此れ昔人に是の疾無
く、今の人に始めて是の疾有るに非ず、抑も昔人の病は略す可く、今の人病は獨り詳ら
かにす當きに非ず。余所以に茲を念うこと茲に在り⁵⁵、日に孜孜として筆墨に従事するの
間も、惟だ此れ人を救うことのみ、是れ論ず。要ず夫れ己の心を推して、天下をして咸く
人の願いを慰及さめしむるに外ならず。斯れ已耳^{56 57}。

(私の高曾⁵⁸は經学で身を立て代々その業を受け継いできた。私も若いときに宮墻⁵⁹に
加わり、…奮起して人々をいたみ哀れむ志をもった。…そこで張仲景、李東垣、朱丹溪各
先生の論述を調べたが、實際的でなく回りくどいため思いは晴れなかった。朝廷が変わっ
て後、住まいを移すことは一度のみではなかった。…常々、昔の文章を調べ、言葉を集め
たが、順調にはいかず、少しも世の中の役に立つようなことはなかった。江淮や、吳越の

55 「念茲在茲（茲を念うこと茲に在り）」は、『尚書』虞書、大禹謨の「帝念哉。念茲在茲、釋茲
在茲。名言茲在茲、允出茲在茲、惟帝念功（帝念えや。茲を念うこと茲に在り、茲を釈ても茲
に在り。茲を名言せんこと茲に在り、允茲に出づれども茲に在り、惟れ帝功を念え）」、宋・蔡沈
『書經集傳』卷一「茲、指臯陶也、禹遂言念之而不忘、固在於臯陶、舍之而他求、亦惟在於臯陶。
（茲は、臯陶を指すなり、禹は遂に言う、之を念いて忘れず、と。固より臯陶に在り、之を捨て
て他に求めんとするも亦た惟だ臯陶に在り）」から、「このことを思って忘れない」の意。

56 郭志邃、『痧脹玉衡』序、『續修四庫全書』、冊1003、上海古籍出版社、1997年、pp. 666-667。

57 訳者注。『痧脹玉衡』自序に、「余高曾以經術起家、箕裘累葉。余少列官墻、讀古惠鮮環保、慨
然有恫恤生民之誌、嘗願為愁者解困、危者蘇命。因追閱仲景、東垣、丹溪諸先生論。而帖括所拘、
有懷未展。鼎革以後、播遷不一、或羈留武水、或跋涉秦溪。每憶昔年尋章摘句、不過淹蹇一身、
毫無神益於世。既而旅食江淮、浪遊吳越、所在時行痧脹、被禍不少。余心惻然、思得一術以濟
之、竊恐世人犯而不識、多有坐視其死者。故凡遇杏林先輩未嘗不造而問焉、見松隱異人、未嘗
不就而請焉。即冊籍所載、鮮不於晤對之間、互相參考、然於痧也、究不得一要旨。以後返掉攜李、
搜求高曾所遺前賢諸秘草、有其傳變難治異癥、或定於嫌洛大儒、或議論楚粵高士。雖篇頁零星、
各有同異、皆透參『靈』、『素』。『甲乙』諸經、以推廣仲景先生之意、借專籍無傳、沈理日久、而
古人精秘尚未出也。余日夕究心、始悟痧脹變端、總其大綱、撮其要領、遂得歷歷措施、無不響驗。
余特慮斯疾勿辯、貽禍無窮、故為之推原其始、詳究其終、深憫斯疾之為害、不忍不有斯集也。雖
然醫者治疾、尤百工治事、此提一規、彼挾一矩、有一定之法、無一定之用。故余雖獲獲言、尤
必酌量子累黍之度、而神明其治法焉。此非昔人無是疾、今人始有是疾也、抑非昔人之病可略、今
人之病當獨評也。余所以念茲在茲、日孜孜焉從事筆墨間、惟此救人是論。要不外夫推己之心、俾
天下咸慰及人之願斯已耳。」とある。

58 訳者注。高曾は、高祖（曾祖父の父）と曾祖（曾祖父）。または遠い先祖。

59 訳者注。宮墻は、師の門、『論語』子張の「叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯
以告子貢。子貢曰、譬之宮墻、賜之牆也及肩、窺見室家之好。夫子之牆數仞、不得其門而入、不
見宗廟之美、百官之富。」（師を家の垣根に例えた）から。

地を転々としたが、行く先々で、痧脹が流行し罹患する人がたいへん多かった。私の心は痛んだ。治療法を得てこの人々を救いたいと思った。…その後、^{ついで}橋李⁶⁰に戻り高曾の残したすぐれた人の密かに書かれた原稿を探り求め、病状が変化して治療が難しい変わった症状があれば、^{れんらく}濂洛⁶¹の大儒の理論に基づき、またこれを^{そえつ}楚粵⁶²の優れた人と検討した。細々とした小論文はそれぞれ多少の違いはあると言っても、すべて『靈枢』、『素問』、『甲乙経』の諸経を念入りに参考にし、張仲景の考えを発展させていた。残念なのは、専門書がなく、長い間埋もれていて、古人のは未だに出てこない。私は、日夜、心を集中して、はじめて**痧脹**の原因に気付いた。そのおおもとを集め、その要点をまとめ、ついにはっきりとした治療法がわかった。それは効き目がないというようなことはなかった。…そこで、私は過去の学説を取り入れるとしても、必ず加減を考慮してその治療法を明らかにする。昔の人にこの病がなく、今の人にはじめてこの病があるというのではない。昔の人の病をおろそかにして、今の人**の病**だけを明らかにすべきではない。このことを決して忘れず、毎日、文章を書くことに従事する間も、人を救うことだけを考え、これ論じた。かならずや、自分の心を推し進めて、天下をしてことごとく人々の願いを、かなえさせることに他ならないのだ。これだけだ。)

郭氏は儒学を修めた医師なので、世の人を救済する心を持っていた。王朝交代の後、科挙のための勉強を止め、医術で生計の道をはかることに転じ、痧症を専門に研究した⁶³。彼は、師匠に弟子入りして医術を学ばなかったようだが、宋以降の医学書と自分の経験を整理して一冊の痧の治療の専門書を出した。彼は、この痧症論は自分の独創であると確信していた。

歴代相い沿いて神醫^{こも}迭^{おも}ごも出で、載籍紛々とし、疾苦を救わんと^{たれ}惟^{おも}うも、孰か^{おも}意^{おも}わん痧脹の一症、時に命を須臾に懸け、變を頃刻^{きざ}に兆^{きざ}す者あるも、竟に置きて論ぜざるとは^{64 65}。

60 訳者注。橋李は、古地名。今の浙江省浙江省嘉興市あたり。

61 訳者注。濂洛は、「北宋理学の二つの学派。『濂』は濂溪と号した周敦頤をさし、『洛』は洛陽の程顥、程頤を示す。」

62 訳者注。楚粵は、現在の湖南省、広東省あたり。

63 郭志邃、『痧脹玉衡』「序」、pp.666-667。

64 郭志邃、『痧脹玉衡』「序」、p.666。

65 訳者注。『痧脹玉衡』自序に、「歴代相沿、神醫迭出、載籍紛紛、惟救疾苦、孰意痧脹一症、時有懸命須臾、兆變頃刻者、竟置不論。」

(昔から代々、名医がかわるがわる登場し、多くの医書も世に出され、疾苦を救おうとしてきたが、では痧脹という一症に注目した者があつたらうか。時として、一瞬で命にかかわるようなことになり、あつという間に変化を兆す場合もあるというのに、ついに捨て置かれてこれまで論じられることは無かった。)

彼は、歴代の医学が痧を十分に論じていないことを不満に思っており、ゆえに書を著し説を立て、その治験を広く伝えた。彼は医経の中の知恵は認めてはいるが、ややもすれば『内経』を多く引用する多くの人が、痧の治療の捷徑しうけい(近道)である刮放くわつぱうがすなわち医経における針砭いしはりであることを知らないと批判している⁶⁶。

郭氏は儒医の志があり、また痧の治療により自身の地位を向上させるという意図もあった。日本の国立公文書館蔵の『痧脹玉衡』⁶⁷には何元英⁶⁸と陳士鏞⁶⁹の康熙十四年の序文がある。この二つの序文はこの刊本にのみ見られる。この本の一番前に別に王庭の和刻された序文があるが、ただ本文の形式と内容から、原書は中国のものとするべきである。

この書の封面の右欄には「橋李郭志邃右陶先生増訂」、真ん中の欄には全名「痧脹玉衡全書」、左欄下には「裕齋藏板⁷⁰」と書かれている。版木に彫られた「裕齋」と、郭氏の医院の「裕賢堂」と関係があるのか、あるいは郭氏の号なのかはわからない。1675年版『痧脹玉衡書』の郭志邃の序文は燈月(正月)となっているが、公文書館版の何元英の序は、この年の秋の日躔壽星之次⁷¹となっており陳士鏞の序文はその年の十二月になっている。郭氏の自述によれば、『痧脹玉衡』が出版された当時、「同人と偕たがいに互相いに参訂し、急ぎてこれを行う(同志とともに互いに照合し訂正し、急いで行った)」^{72,73}

66 郭志邃、『痧脹玉衡』、p.761。

67 訳者注。国立公文書館には、旧蔵が医学館、昌平坂学問所の2書がある。いずれも康熙14年(1675)の序刊。

68 訳者注。何元英。「字蕤音、浙江秀水県人。清初政治人物、書法家。順治十二年(1655年)進士、官至通政使司参議。工書法。與詩人張綱孫友善。』『山西通志』に「何元英浙江人進士康熙十二年任」。

69 訳者注。陳士鏞、『欽定四庫全書総目』に、「明江南治水記一卷、國朝陳士鏞撰、士鏞號宿峯秀水人、康熙初以貢生閣試授主事…」とある。

70 訳者注。藏板。「出版した書物の板木(版木)・紙型を所有していること。版權所有者の表示に使われたことば」

71 訳者注。日躔壽星之次。『三命通會』に「秋分日日在軫一度今在翼十度日出卯初四刻入酉正初刻後十一日躔壽星之次入辰軫十二度晝五十刻夜五十刻」とある。秋分の日近く。

72 郭志邃、『痧脹玉衡』、p.731。

73 訳者注。「偕同人互相参訂、急而行之。」

ので、参関者はすべて郭氏の同郷のものであったために、初刻本は慌ただしく郭氏の地元で刊行されたとすべきだろう。しかし、当時すでに郭氏は、都で官職にある別の同郷人二人に序文を書いてもらおうと考えていた。1674年に郭氏がこの書の原稿を完成させた後、参関した同郷の徐日禧（字は旭始）は、郭氏の原稿を徐氏の従弟の何元英に持って行き序文を求めた。何氏は1655年に進士となり、当時は御史の官位にあり、書家として名をなしていた⁷⁴。陳士鏞は、郭氏を「吾が友」の「年家眷弟（友人である同年に科挙合格した者の弟分）⁷⁵」と呼ぶ、また彼は工部郎中と地方官を務めていた。陳氏は、郭氏の痧の治療を「穏やかな薬味で、血気を調える」⁷⁶と評した。この二つの序が初刻本の出版時より後となっていることにより、日本の公文書館の版本は1678年版『痧脹玉衡』の原形を留めていると思われる。その後の重刊は、この2つのお義理で書かれた序を削除した。この様なことは、清代では珍しくない。

『痧脹玉衡』は、その後、痧を論じる専門書の「祖本（最初の本）」となり、他書に転写されて流布し、痧は次第に一つの疾病のカテゴリーとなり、ほぼ一定の治療法を有するようになる。清代に於いて『痧脹玉衡』は十数種の刊本がある。雍正六年(1728年)に、朱永思は「有陶」を作者として、一卷本の『治痧要略』を刊行した⁷⁷。康熙朝⁷⁸の刻本を除けば、その後の本はほとんどが道光⁷⁹年間の疫病の流行の後の刻本で、これらの疫病は常に「痧」のカテゴリーの下に置かれている。しかし『痧脹玉衡』は、痧を論じた初の専門書といっても、「痧脹」に対する理論的な説明はかなり短い。『痧脹玉衡』の大綱である「痧病発蒙論」は、如何に痧症を見分けるか、痧を治療するかを主に検討している。その後の「玉衡要語」は、医案（カルテ）の形式で様々に異なった痧症の治療を検討している。『痧脹玉衡』の大部分の紙幅は、郭氏の経験談であり、様々に異なった痧症から帰納することにより、痧の治療の理論をまとめ上げている。本書の中には、また備要薬方（処方箋）も附されており、『痧脹玉衡』に処方集としての意味合いを付け

74 何元英、「序」、『痧脹玉衡』（日本公文書館本）、pp.1a-4b。二人の略歴は、許瑤光『（光緒）嘉興府志』、卷52、中國方志庫、1879年刊本、pp.5562-5563、p.5579を参見。

75 訳者注。年家眷弟。旧時、同年に科挙の試験に合格した者同士を年誼といい、お互いの家庭を年家という。眷弟は、姻戚間で同輩に対する自称。

76 陳士鏞、「序」、『痧脹玉衡』（日本公文書館本）、pp.1a-3a。

77 巖世芸主編、『中国医籍通考』、上海、上海中医学院出版社、1990-94年、p.1651。痧書は、刊本が複推であるのみならず、内容も重複し、署名が書き換えられることも少なくない。したがって、文中に引く出版資料は、すべて『中国中医古籍総目』と本人の見るところに依った。薛清録主編、『中国中医古籍総目』、pp.497-508。「有陶」は、「右陶」とするべきだろう。

78 訳者注。康熙朝。1662年～1722年。

79 訳者注。道光。1821年～1850年。

加えている。康熙十七年の増補は、多くの資料を追加しただけであり、これより当時の人の疑問に答えようとしたのだ。『痧脹玉衡』は、医案と方書（処方集）⁸⁰の合編のようで、治験を重視していて理論的色彩は濃くない。しかし、郭氏は刮挑（刮痧や刺絡）を主な治療とする一般的な民間の医者とはちがひ、彼は儒医のように、脈により各種の痧症と使用する方薬を解釈する。とはいってもやはり、刮挑のような患者に負担を与えるような治療法を必ず使わなければならないというのが、『痧脹玉衡』の主な特色となっている。

現代的な用語でいうと、『痧脹玉衡』は、すぐさま「剽窃」^{ひようせつ}された。康熙二十五年（1686）、王凱^{おうかい}という医者が『晰微補化全書』^{せきびほかせんしよ}⁸¹を出版したが、扉（封面）の題名は『痧症全書』^{82 83}となっていた、何汾^{かふん}⁸⁴は嘉慶三年（1798）再び新たに編集して名を『痧書』⁸⁵と変えた。この書は、『痧脹玉衡書』を大きく書き換え写したものである。例えば文章を潤色したり、あるいは『痧脹玉衡』の患者の履歴を簡単にしたりした。清代の名医、王学権⁸⁶はすでにこの剽窃事件に気付いており、現代の学者の多くもまたこれについて

80 訳者注。方書。『漢方用語大辞典』に「方剤の専門書」、また「書中に処方のある一般の医書」とある。方剤は「単に方ともいう。方とは医方、剤とは調剤をさす。」

81 訳者注。『晰微補化全書』。『痧証文献整理与刮痧現代研究』 pp.129-158に、『痧症全書』として翻字点校整理されている。

82 筆者が実見した『晰微補化全書』は、上海図書館所蔵の二種と、上海中医薬大学所蔵の二種。三種とも欠落頁があるが、相互に補完できる。志のある人は、この書と、書中の注を整理出版できるだろう。王凱が、どのように『痧脹玉衡』に、手を入れたかと言う問題は、相当に複雑である。紙面に限りがあるため、別に検討したい。

83 訳者注。『痧症全書』は、上記『晰微補化全書』の注も参照。『中医大辞典』には「痧症専著。三卷。清・王凱編撰。書成於1686年。原序称「深山野人」林森曾向王氏面授『痧書』、復経王氏綜合古今有関文献結合個人見聞編成此書。全書詳細論述痧原、辨証、治法、用薬大法、多種痧症証治及治療方剂等。内容与『痧脹玉衡』頗多重複、究竟由王氏所自採、抑或由深山野人所伝授、則已不可辨。此書也雜有一些附会論述。現存二十余种清刊本」とある。

84 訳者注。何汾。『中医人名大辞』に「字丹流、又字丹楼。清代江蘇泰興県人。何大年長子。早年習儒、為太学生。兼精医道、歳施薬餌、活人甚衆。喜刊刻善本医籍、曾刪訂王凱『痧証全書』三卷、重刻於世。弟何精、精通正骨術。見、『四部総録医薬編』、『泰興県志』」

85 訳者注。『中国古医籍書目提要』 p.930に「『痧書三卷』1686」「林森（薬樵）伝授、王凱（養吾）編」「[主要版本] 清光緒四年（1878）北京慈幼堂刻本 天医（天津医科大学図書館） 蘇中（蘇州中医医院図書館） 蘇医（蘇州医学院図書館）」

86 訳者注。王学権。「清の医学者。字は秉衡。浙江錢塘（浙江省杭州市）の人。塩官の家の出身で、王孟英（士雄）の曾祖父であり、医術に長けた。著書の『重慶堂隨筆』（1808年）では、多くの名言を収集し、自身の医術成果を記述。傷寒証治・本草薬性・脈診などに対する見解や、西洋医学の生理解剖への寛容な態度を示し、婦女子の纏足に反対した。」また、「清代医学家（1728-1810年）。字秉衡、晚号「水北老人」。徙居浙江塩官、後又遷至杭州。以医名、頗有個人独到見解、其思想对其曾孫王孟英後來於温病学之創見頗有影響。其時適值西学東漸、王氏亦受其影響。所著『医学隨筆』一書、係後來由其子王国祥等数輩最後補充完成者。後更名『重慶堂隨筆』行世。」

言及している。上海中医薬大学所蔵の『晰微補化全書』には、王氏の剽窃を批判する朱筆の書き入れが有る。『痧脹玉衡』に比べれば『痧症全書』の方がさらに方書（処方集）の形式を呈する。それは『痧脹玉衡』の理論部分を削除し、完全に痧症治療に対する証治と方薬について論ずるものとなっている。であればこそ、『痧症全書』は、使用する上で、医案、処方、理論が混在する『痧脹玉衡』に比べ、検索することが容易で、痧治療の実践マニュアルのような形となっている。そしてこれは、その後の数多くの痧に関する書の主要な形式ともなった。

王凱の生涯については不詳である。彼の父は、もとは海寧⁸⁷に住んでいたが甲申⁸⁸（明滅亡）以後に常州⁸⁹で亡くなり、王凱もここに居住するようになった。伝わるところによると、王凱は「詞賦を巧みにし、性格は慷慨⁹⁰、博く医の理に広く通ず（詞賦が上手く、気概があり、医の理論についても広い知識を持っていた）」とされる^{91,92}。王氏は自らの学問には師承があるという。

吾師姓は林、其の先は閩人にして、諱は森、號は藥樵、自ら深山野人と號す。…『痧書』一冊を出だし予に付す、……既に又我に手法を授け、予も復た古人を綜核し、聞見する所を印し、是の書を編成す^{93,94}。

87 訳者注。海寧。浙江省嘉興市に位置する。旧名、塩官。

88 訳者注。甲申。ここでは1644年の明滅亡。

89 訳者注。常州。江蘇省南部に位置する。

90 訳者注。慷慨。太っ腹である。気概がある。

91 林森伝授、王凱輯、何汾刪訂、胡傑校言了、『痧症全書』1876年重刊本、p.2b。

紀征瀚、「『痧症全書』及其主要伝本」、『中華医史雑誌』38.3、2008年、pp.170-175。

92 訳者注。王瑩瑩等『痧証文献整理与刮痧現代研究』（以下『痧証文献整理』と略す）p.347収載の『注穴痧症驗方』、「原序節録」に、「海寧王君、諱治行、號服。吾新建之裔、博學多才、晚以醫名。甲申鼎革、老卒於常。其子凱、號養吾、遂家毗陵、工詞賦、性慷慨、博通醫理、得林氏傳刻痧書救世、近時痧症尤多、從此人知治法。藥樵、養吾自當俎豆醫林云。」

93 林森伝授、王凱輯、何汾刪訂、胡傑校訂、『痧症全書』王凱原序、p.2a。

94 訳者注。『痧証文献整理』中編の『痧症全書』の点校整理は、清嘉慶十九年甲戌（1814年）棲雲山藏板刻本を底本とし、清光緒二年丙子（1876年）刻本を校本とする。ここに、この文は見られない。王瑩瑩等による校後記によれば、数十回翻印され、内容、書名とも様々に変容し、元貌は失われているという。またこの文と同一のものは、『痧証文献整理』の『注穴痧症驗方』や『急救痧症全書』などに「原序節録」として載る。この「原序節録」に「吾師林姓、其先閩人、諱森、號樵、自號深山野人。性韜晦、有山水癖、佳句妙楷、時與丘壑爭奇。一日遇於荆溪之南嶽、拂石對語片響投治、徐而叩之、凡天文、術數、地理、方藥、無不精貫。予追隨不忍釋、野人曰、偉男子立身行己、豈得虛生於天地、必將世上人維持調護、所貴一點真心耳。出痧書一冊、付予曰、子知醫、是書不道人所已言、不經人所已試、持此以往、可與古人頡頏雷漢間矣。既又授我手法。予復綜核古人、印所聞見、編成是書、倖得張子之庵、詳加訂釋、紫崖詹子慨為梓傳。二十年來、始得相與有成、以廣野人之惠澤、豈偶然哉」とある。

(私の師は林という姓で、その先祖は閩人(福建省)である、諱は森、号は葉樵、自ら深山野人と号した。『痧書』一冊を出して私に託した。また私に手法を授けた、私は昔の人の考えをまとめ、見聞したごとと突き合わせ、この書を編纂した。)

王凱に書を伝えたこの人物「林森」は意外にも郭志邃とやや似ている所がある。彼は、経世(世を治める)の志を持ち、様々な知識に広く通じる隠者であり、王凱に『痧書』を用い経世済民を行うよう勧めた。最も興味深いのは林森が書を授けるときに言った「是書、人の已に言う所を道わず、人の已に試す所を経さず。此を持して以て往かば、古人と霄漢の間に頡頏すべし。(この書は、すでに人が言っていることは言わない、すでに人が試したことは書かない。これを持ち続ければ、昔の人に劣ることはないだろう)」⁹⁵である。この文章と、『痧脹玉衡』、凡例にある「言実ならざること有り、治効あらざること有る者のは、一句も載せず。藥当らざる有りを、用明きらかならざる有る者は、一味も入れず(本当でないこと、治療で効き目の無い記述は、一句も載せていない。適確でないもの、作用のわからない薬は一つも入れていない。)」⁹⁶また云う、「余の此等の症を治する、處に隨いて人を救うに、確として奇驗有り。竊に恐る前人論無く、後賢を啓き難きことを、因て著して集と為し、仍敢て秘せず、以て諸を世に公にす。庶幾わくは其れ以て我が心の忍びざるを行う有りて、幸いに斯世の用いる所無きの人と為らざらんことを。(私のこれらの症状に対する治療は、いたるところで人を救い、確かに不思議な効き目があった。今までの人が論じていないために後の賢人を導くのは難しいのではないかと心配し。そこで本を書き、あえて秘密にしないでこれを世の中に公開する。これをもって私の心が忍びないことを行って、幸いにも私がこの世で無用の人とならなければと願う)」と^{97 98}、この両者は書中の内容が、すべて実際に経験したことで、そして今までの人はまだ述べていないことを強調しており、まったく良く似ている。

王凱は、『晰微補化全書』の中で、『易経』の六十四卦に分かつ方法をもちいて、医学と、「易」が一つの道理に基づくのだという医学の宇宙観を再現する。いずれにしても、

95 林森伝授、王凱輯、何汾刪訂、胡傑校訂、『痧症全書』王凱原序、p.2a。

96 郭志邃、『痧脹玉衡』凡例、p.669。

97 郭志邃、『痧脹玉衡』痧症發蒙論、p.673。

98 訳者注。郭志邃、『痧脹玉衡』痧症發蒙論に、「余之治此等症、隨處救人、確有奇驗。竊恐前人無論、難啓後賢、因著為集、仍不敢秘、以公諸世。庶幾其有以行我心之不忍、而幸不為斯世無所用之人歟。」とある。『中国医籍通考』「痧症全書」p.1656では、「又名『痧症匯要』、『注穴痧症驗方』」とし、序として同文を紹介する。

王凱の言う師伝（師より授かった）とその六十四卦に分かつ方法によって、彼がその術を神がかったものにみせようとした意図は、かなり明白である。郭志邃と同様に王凱もまた多くの常州出身の官員（官僚）に、彼のために序を書いてもらうよう頼んだ。郭と同様に、王が官僚の名高い人に序を書いてもうことを頼む行為からわかることは、痧の治療の名人として、また儒者を自認する医者として、医者（医家）の世界で身を立てていこうとする戦略であった。彼らは、郷里の社会ネットワークを出世の手づるにして、知識人や官員と共通の文体で医学書を書き、郷里の社会的地位を有する人の援助を得て、故郷の上流の教養人の評価を得て、自分の社会的地位を高めたのであった。

王凱の書は、沈金鰲（1717-1776）⁹⁹の賞賛を受けた。沈金鰲は、『痧症全書』を合わせ改めて一卷とし、「痧脹源流」¹⁰⁰と名づけ、彼の大著『雜病源流犀燭』に収めた、彼は、「痧脹源流」の中でこの巻の由来を説明している。

夫れ痧脹の病は、古自り已に有れども、痧脹の名、古自り未だ立たず。……故に凡そ後世に焮、刮、刺等の法、及び之を治するに所以の方劑、皆な古自り未だ專詳ならざる所なり。……今時痧脹を詳らかに論ずる者は何人なるや、王養吾是れなり。養吾は名は凱、毗陵の人、醫に精し、尤も痧症を善くし、曾て七十二種正變の痧を詳らかに列つ、康熙の間に『痧症全書』を刻して世に行れども、其の板、惜くも早に湮没し、其の書甚だしくは傳わらず。嚮に余、痧脹一症において、曾て遍く古方書の乾霍亂¹⁰¹等の症を言うものを稽え、參ずるに己れの見を以てし著して論を為す。後に、養吾の書を得て之を讀むに、詳らかに盡くし遺すは無し、仍お復た理は精しく詞は達す。其の兼症、變症、類症を言う處は、未だ頭緒¹⁰²太だ煩なるを免れざると雖も、然れども柢を掘り根を搜し、前人未だ發せざる所を發す。直ちに覺ゆ、養吾未だ書有らずは、痧症煙霧中に隠るるが如し。養吾既に書有りては、痧症は日月臨照中に顯るが如く、人は皆共に見るを得るなり。余嚮の論ずる所を視るに、殊に簡為りて未だ該せず。乃て即ち養吾の言の最も精確なるもの、採輯して之を條貫し、以て斯篇を著す。又人余の斯篇の實は養吾に本づくことを知らず、反て養吾を没すること

99 訳者注。沈金鰲。『中国医学史レファレンス辞典』に「(1717～1767年) 清の医学者。字は芊緑、号は汲門、晩年の号は尊生老人。江蘇無錫（江蘇省無錫市）の人。経史に広く通じ、詩文を考究。科挙の試験に合格せず、中年以降に医学に力を注いだ。著書に『沈氏尊生書』があり、広く伝わった。」

100 訳者注。『中国古医籍書目提要』 p.931に「『痧症源流犀燭』 1821」「『痧脹源流』 1821」。

101 訳者注。『巢氏諸病源候総論』乾霍亂候に「冷熱不調、飲食不節、使人陰陽清濁之氣相干、而變亂於腸胃之間、則成霍亂。霍亂者、多吐利也。乾霍亂者、是冷氣搏於腸胃、致飲食不消、但腹滿煩亂、絞痛、短氣、其腸胃先挾實、故不吐利、名為乾霍亂也。」とある。

102 訳者注。頭緒。条理。心の色々な思い。物事のいとぐち。

を恐れ、因りて此に特に之を申ぶ、また人の美を掠ざるを敢てせざるなり、しかいう^{103 104}。

(痧脹の病は、昔からすでにあったが、痧脹の名は、昔から今に至るまで病名をたてることはなかった。……だから、そもそも後世の焮ぐ、刮る、刺すなどの方法や、これを治せる薬剤は、すべて昔から明らかにされていない。……今、痧脹を明らかに論ずる者は誰だろう。王養吾が、その人だ。養吾は、名は凱、毗陵¹⁰⁵の人である。医学に通じ、特に痧症にすぐれ、72種類の正変の痧を細かに分類した。康熙の時代に『痧症全書』を刊刻し、世の中に広まったが、惜しくもその版木は早くに失われ、その書はそれほど伝わっていない。以前私は、痧脹の病を、古い医学書に言う乾霍乱などの病を調べ、自分の意見を付け加えて論じた。のちに、養吾の書を手に入れ、これを読むと、明らかにし尽くして言い残しているところはない。また理論は正確で言葉も的確である。この書の中で兼症、変証¹⁰⁶、類症¹⁰⁷について書いているところは、非常に煩雑なのはまぬがれないが、徹底的に調べ上げて、以前の人がいまだに明らかにしていないことを明らかにしている。ただちに養吾が書を著すまでは痧症は煙霧中に隠れているようだったが、養吾が書を著してからは、痧症は日月臨照中にはっきりと見るように、すべての人が痧症を知ることができるようになったということが分かった。私が以前に論じたものを見ると、大変簡単であり、未だに充分でない。そこで養吾の言論で最も精確なものについて取り集めて、体系化しこの篇を書いた。さらに、人が私のこの篇が本当は養吾に基づくことを知らないで、かえって養吾が隠れてしまうことを恐れて、そこで特にこのことをはっきりとさせ、他人の優れた点をかすめる気がない

103 沈金鰲、『雜病源流犀燭』、『沈金鰲医学全書』、北京、中国中医薬出版社、1999年、p.380に収載。

104 訳者注。沈金鰲、『雜病源流』、『痧脹然犀燭』、痧脹源流に、「痧脹之病、自古已有、痧脹之名、自古未立。……故凡後世焮刮刺等法、及所以治之之方劑、皆自古所未專詳。……今時詳論痧脹者何人、王養吾是也。養吾名凱、毗陵人、精於醫、尤善痧症、曾詳列七十二種正變痧、於康熙間刻『痧症全書』行於世、而其板惜早湮沒、其書不甚傳。嚮余於痧脹一症、曾遍稽古方書言乾霍亂等症者、參以己見著為論。後得養吾書讀之、詳盡無遺、仍復理精詞達。雖其言兼症、變症、類症處、未免頭緒太煩、然掘柢搜根、發前人所未發。直覺養吾未有書、痧症如隱煙霧中;養吾既有書、痧症如顯日月臨照中、而人皆得共見也。視余嚮之所論、殊為簡而未該矣。乃即養吾之言最精確者、採輯而條貫之、以著斯篇。又恐人不知余斯篇之實本於養吾、而反沒養吾也、因於此特申之、亦不敢掠人之美云爾」

105 訳者注。毗陵、亦作「毘陵」。古地名。本春秋時、吳季札、封地延陵邑。漢置縣、治所在今江蘇省常州市。三国呉時、為毗陵典農校尉治所。晋太康二年始置郡、治所移丹徒。歷代廢置無常、後世多稱今江蘇常州一帶為毗陵。

106 訳者注。変証。『漢方用語大辞典』に「①正証に対していう。変則的な病証。②治療上の錯誤(たとえば汗法・吐法・下法などを不適當に使用する)、あるいは病人の正氣不足、調理の失敗などの原因により、疾病が実より虚に転じたり、簡単なものから複雑なものへと情況が転じることである」

107 訳者注。『薛氏医案』「癘瘍類症」の注に「類症者與癘形狀相似而所因不同也」とある。

ことをここに宣言する)

『雑病源流犀燭』は、乾隆三十六年（1773）の成書である。沈金鰲^{しんきんごう}は、王凱^{おうがい}の書の主要な内容のほぼすべてを書き写した。ただし書中の医案は削除した。沈金鰲が引用する薬方（処方）は、六十四卦をもちいて名づけられており、薬方の次にはさらに歌訣が附されていたが、何汾^{かふん}はこれらをほぼ完全に削除している。『痧脹源流』と何汾の出版した『痧症全書』を較べると、沈の書は一卷ではあるが、王凱の書の主要な内容をほぼすべて書き写したもののようである。

乾隆五十九年（1796）、徐東皋^{じょとうこう}¹⁰⁸は、彼が書き写した『秘伝治痧要略』¹⁰⁹を出版した。この書は四川の歐陽調律より伝わったが、歐陽がいつこの書を著録したかは、詳しくはわからない。しかしその内容は『痧脹玉衡』の文章を削って整理したものであった¹¹⁰。注目に値するのは歐陽が「秘伝」と自称し、作者であると自負していることである。道光二十四年（1844）、張惟儀^{ちやういぎ}がこの書を再び刊行した時に評語を書いている。

『痧脹玉衡』一書は繁^{はん}にして簡ならず……其の経絡を別ち、治法^{じほう}を條するを求め、刮刺は必ず不盡の義^{きわ}を窮^{やくじ}め、薬餌は必ず不效の故えを究め、條分縷晰にして、また簡約易明なるは、蓋^{けだ}し未だ之を前に聞かず^{111 112}。

（『痧脹玉衡』という書物は、煩雑で簡明ではない……経絡を分けて、治法を書き並べることを追求し、刮刺については効果がないことは必ずその意味をあきらかにし、薬餌^{やくじ}の効き目がないときは必ず理由を追及し、分析が精密で、文章が簡明で容易に理解できることは今までに聞いたことがない。）

108 訳者注。徐東皋。張介賓、『景岳全書』、1624年撰には、「徐東皋」の名がみえる。「一瘡毒久蓄發為瘋毒亦名楊梅癰漏或蝕筋或腐骨潰爛不收最為惡候近來治法惟五寶丹為最效及徐東皋楊梅癰漏方或秘傳水銀膏宜擇用之」、「大健脾丸又名百穀丸○徐東皋曰此方健脾胃滋穀氣除濕熱寬胸膈去痞滿久服強中益氣百病醫統八五」など。しかしこの人物が『秘伝治痧要略』を乾隆五十九年（1796）に刊行したとは考えにくい。

109 訳者注。『秘伝治痧要略』。『中国医籍通考』p.1703に、歐陽調律『秘授治痧要略』として記載。

110 歐陽調律、『秘授治痧要略』、管頌声、表臨、『痧法備旨』、蒼溪管氏、1853年刻本、上海図書館蔵に収載。該書の原目録題は『秘伝治痧要略』。

111 張惟儀、「重刊治痧要略叙」、管頌声編、『痧法備旨』p.5aに収載。

112 訳者注。『痧証文献整理』、p.576に管頌声編、『痧法備旨』、張惟儀、「重刊治痧要略叙」。ここに「『痧脹玉衡』一書繁而不簡……求其別経絡、條治法、刮刺必窮不盡之義、薬餌必究不效之故、而條分縷晰、又簡約易明者、蓋未之前聞」とある。

張惟儀^{ちやういぎ}が言っているこれらの問題については、郭志邃^{かくしすい}もすでに言及していた。にもかかわらず、王凱にしても歐陽調律にしても、『痧脹玉衡』を再び新たに整理した理由は、『痧脹玉衡』の論理がはっきりとしておらず、使いにくいものであったからなのだろう。一般的な医者にとって言えば、医書は一目瞭然で使いやすいのが最も重要なポイントである。理論的思考や、もっといえば剽窃^{ひょうせつ}したかどうかなどは、すべて重要な関心事項ではない。王凱や歐陽調律のような改編者は「作者」だと自認した。沈金鰲^{しんきんこう}のように他人の業績を認めた医者は、痧病を治療してきた医学の伝統の中では、決して多く見られることではない。皮肉なのは、沈金鰲が逆に王凱の剽窃を見抜けずに、後世の医家の嘲笑を買ったことである¹¹³。沈氏ほどの広い知識と見聞を以ってしても、なおこの様な失敗があったのは、かえって医書の版本が複雑で流通も限られていたこと、かつ当時の医家が剽窃に対して、さほど重要視していなかったことを物語っている。

咸豐二年(1852)管頌聲^{かんしょうせい}¹¹⁴が、『秘傳治痧要略』と、別の一冊の彼が集めた写本『痧症指微』^{しやうしび}とを合わせて『痧法備旨』^{さほうびし}¹¹⁵として刊行した¹¹⁶。『痧症指微』もまた大変広く伝わった痧症の別の一冊で、刮挑をもちいて痧を治療するのが主要となっており、方剤についての記述は少ない。なのでその内容は、「脈診」・「弁穴」について多く述べ、歌訣を合わせてのせ、覚えやすく使いやすいというのがポリシーとなっている。またこの他に、一般の医者でも痧症を識別できるように、痧症の分類もまた主要な内容となっている。注目にすべきなのは、『痧症指微』の作者もまた王凱と同じように、この書の由来を、俗世を離れた人である天台山の普淨^{ふじょう}に託し、書の冒頭に名前のない序文をのせる。この序の作者が言うには、自分の子どもが痧を患い、のち奚^{けい}という名の医者が治した、そこで転じて(考えが変わり)、世の中に痧症というものがあり、痧の治療法は刮挑が主であって、医薬ではないと信じるようになった。『痧症指微』は、つまりこの奚という姓の医者が伝えたものである¹¹⁷。この序言の作者は、効果があったので、自ら登場してこの書の序を書き、確かなものであると保証した。『痧症指微』を読んだ孫圻^{そんき}が指摘しているのだが、この書の序に、「何人に於いて作るやを知らず、また歲月も識^しるさず。

113 紀征瀚、「『痧症全書』及其主要伝本」、pp.170-175。

114 訳者注。管頌聲、『救傷秘旨』、管序に「時咸豐二年歲在壬子中秋前三日黃岩管頌聲廣堂甫書於米船樓」とみえる。

115 訳者注。『痧法備旨』、『痧証文献整理』p.573に収載。

116 現存の抄本は、釈普淨、『痧症指微』、『国家図書館蔵稀見古代医籍鈔(稿)本叢編』冊11、北京、全国国書館文献縮微複製中心、2002年収載に見える。『痧症指微』は、また『痧症指微集』、『痧症指微全集』と称される。

117 巖世芸主編、『中国医籍通考』痧症指微序、pp.1732-1733。

書は邱天^{きゅうてん}が序輯す、詳らかに普浄、佳棟について述べているが、殆ど即ち輯者^{ほん}の手より出づるか？（この書の序は誰が書いたかもわからず、何時なのかも書いていない。この書は邱天が序をかいて集めた、序で詳らかなっているのは普浄と佳棟であるが、ほぼ輯者がかいたものではないか？）¹¹⁸と、記している。孫玘はこの書を纂輯^{さんしゅう}したのは邱天でありすなわち序を書いた人である、そしてこの書の伝承の由来は彼によるのではないかと疑っている。ある版本の『痧症指微』の序は佚名であり、高僧の伝書に依託し、病気を治療した医者^{けい}の名前は伝わっていない、しかも奚という医者を紹介し、序を書いた友人が名を残してしまった事から見ると、本書は下層の医者^{つぼ}の経験談のようにみえる。しかしその内容を仔細に見て見ると、書中の二つの指導的原則は「治痧常明経絡」と「審脈」であるが、本当は『痧脹玉衡』と『痧症全書』から引き写しており、刺穴の方法もまた『痧症全書』を踏襲している。しかし『痧症指微』の構成は経脈を主とし、痧がどの経に入りどの脈でどの様な種類の痧症になるかが基本である。そのほか、書の中の歌訣と経絡の穴^{つぼ}の場所の図は初心者やあまり字を知らない下層の医者^{つぼ}の便宜をはかり設けられた。

『痧症指微』はかなり短く、簡易な刮放を痧病治療の主な方法とする。これにより常にその他の書にも載せられた。『痧法備旨』^{さほうびし}以外の、『痧症滙要』^{さしゅうかいよう}と『痧症備要』^{さしゅうびよう}にも載っている。『痧症滙要』は道光元年（1821）の成書である。この書はすなわち孫玘^{そんき}が編集したもので、内容は郭志邃、王凱、徐氏の著作から書き写し、あわせて『痧症指微』を附録とした^{119 120}。孫玘はこの三書の内容に重複が多いことに気付き、そこでこれを改めて書き換えた。『痧症滙要』の巻頭に「普浄撰、奚佳棟述、邱天序輯、孫玘訂（普浄が撰し、奚佳棟が述し、邱天序を輯し、孫玘が訂する）」と題される¹²¹、面白いのはこの前の二人は附録にある『痧症指微』の伝承者であったのに、それがいまや「作者」となったことで、『痧症滙要』もまたそのため世俗をはなれた人が伝えた著作となった。現存の『痧症指微』の版本は、孫玘が編集したかどうかによって、二系統に分かれる。一系統は孫氏の序と解説があり、もう一系統にはない。『痧症指微』は郭志邃のような階層の儒医の書き表したテキストから、一般の名もない医者^{つぼ}の実用のために改編し流用されたものとなった。

118 積普浄、『痧症指微』、p.8438。

119 徐氏については何人か不詳。嚴世芸主編、『中国医籍通考』、p.1739。

120 訳者注。上記原注の嚴世芸主編、『中国医籍通考』、p.1739であるが、『中国医籍通考』、pp.1737-1740は、「瘟疫条辨摘要」の項であり、論者の注が何を示すのか不詳。

121 薛清録主編、『中国中医古籍総目』、p.500。

『痧症備要』の作者、郭鏞^{かくけい}の一生は不詳である。其の書の上巻は『痧脹玉衡』より改めて写され、下巻は『痧症指微』から節録され、そして附録の「痧症妙諦^{さしやうみょうてい}」は『痧脹玉衡』と『痧症全書』から節録された¹²²。また「郭鏞」、このどこの出身かわからない医者^{いづこ}は、郭志邃がすでに痧書の伝統において依託対象となっていることを連想させる。郭鏞の著にさらに『晰微補化全書』があるが、これは王凱の原書の書名である。王魁倫の重刊『晰微補化全書』の序によれば、この書はすなわち「姻家^{いんか}の李君、海六は其の先君子の旧蔵を出だし……云く郭鏞太原氏秘纂^{かか}の痧症に係る。太原氏なる者は、何許^{いづこ}の人なるか知らざる也、亦其の時代を詳らかにせず、第^ただ治痧の法を論ずること實に此所より前に未だ有らざるところ^{およ}為りて、以て諸書の逮^{およ}ばざるを補うに足るり。(姻戚の李君海六はすでになくなった親の旧蔵を出し……郭鏞太原氏が秘纂した痧症の書であるという。太原氏なる人物は、どこの人かわからないし、何時の時代に書かれたものなのかもはっきりしない。ただ痧症治療の方法を論じては、実に以前の書にはないものであって、それまでの書物の足りないことを補うのに充分である。)」と¹²³。太原はまさに王氏の郡望であった¹²⁴。どうして郭鏞と王凱の書と関係があるのか、今となっては遡^そ求^{きゆう}することは難しい。ただこの様な事例は、痧症に関する書物で、転写し（転々と書き写し）、依託（假託、人の名をかたる）することにより生じる中国伝統医学における「原作者の身分」（authorship・オーサーシップ）の様々な問題と関係があることが窺える。

痧に関する書は刊本が複雑で、内容が重複するばかりでなく、また書名が書き換えられることも少なくない。痧に関する書は、先人の著作を転写することが、主なテキスト作成スタイルとなり、清末に至るまで止むことはなかった。多くの初期の著作は休むことなく再版され、別に古い本を鈔録し合わせて編集したものが絶え間なく出版された。

たとえば胡鳳昌が同治十二年（1873）に編纂した『痧症度針』¹²⁵は、主に車林一編集の『痧症發微』¹²⁶に基づき、さらに同郷の周邦盛が伝授した手法（テクニク）を受け継ぎ、多くの本から輯集し、自分の意見を加え一冊の書とした¹²⁷。費友棠が光緒九年（1883）

122 郭鏞、『痧症備要』1880年刻本胡乃麟刊本、上海図書館蔵。

123 王魁倫、「晰微補化全書序」は、嚴世芸主編、『中国医籍通考』、p.1760に収載。

124 訳者注。『漢語大詞典』「郡望」に、「古称郡中為衆人所仰望的貴顯家族、如隴西李氏、太原王氏、汝南周氏等。」

125 訳者注。『中国本草全書』第249巻、『痧症度鍼』の解題に「清・胡鳳昌輯。成書於同治十二年（公元一八七三年）。胡鳳昌、號雲谷、餘姚（今屬斯仁）人。此書二卷、為内科醫著。今收錄卷下與本草藥相關之內容、包括發痧時的食忌、藥忌、痧後進食、用藥大忌、及八十三痧症用藥之性味、婦經、功能、主治。今拋、同治十二年（公元一八七三年）重刻本、影印」とある。また『痧症度鍼』は、『痧症文献整理』、pp.249-276に収載。

126 訳者注。『痧症發微』は、『痧症文献整理』、pp.319-341に収載。

に編纂した『急救痧症全集』¹²⁸の場合は、いくつかの他の痧症治療の書の序文を収めるが、ただしその内容のメインは『痧症全書』である¹²⁹。痧の治療書はしばしば寄せ集めスタイルによって拡大するだけでなく、煩雑なものを簡約するスタイルで縮小される。例えば汪欲濟わうよくさいの『痧症全書』の病因、治法は箇条書きにし、歌訣とすることで、記憶暗誦や臨床の便をはかっている¹³⁰。

つまり、痧症に関する書はまさにフラクタル¹³¹のように見える。『痧脹玉衡』から分裂して、いくつかの主要なテキストとなり、さらにこれより分裂や再編集がなされる。この止まることのないテキストの複写、改編、合編、抜粋、さらに多少違いのあるテキストの「衍異」(変化)¹³²、これらはまったく無用なわけでもないのだ。これがまさに「痧症」の命名(naming)であり、「痧」を弁別できる疾病のカテゴリーとならしめた¹³³。痧症のテキストの伝統(歴史)は郭志選の『痧脹玉衡』から始まる。明末しつえきの疾疫流行時に直面して、彼(郭志選)は疫病を「痧」と命名した。これはまさに吳有性が瘟疫一般を「温病」と命名したのと同様である。しかし温病という病名が中国医学の経典から出ており、「傷寒」に異をたてたため、清代の医学経典に習熟した医者たちの間でずっと議論の対象となった。そのため、多くの異なる理論的論争が派生した。痧の状況は、まったく違う。郭志選は、わざと「痧」を名づけ、瘟疫の治療対策を考えた。しかし王凱が『痧脹玉衡』の看板をつけ替えたときに、痧やまいの疫を以前からある各種類の痧と混同してしまった。痧を治療する医者であれ、痧の書物の出版者であれ、ただ原文をそのまま書き写したり、既存テキスト中にある痧の理論を引用するのみで、ずっと同じ資料の中を堂々巡りし続けた。さらに痧は郭志選の後、次第に「秘伝」のスタイルが出現してきた。「秘伝」と言明するのは王凱より始る。その治療法を「秘伝」によるものと言う痧症治療の医者ほとんどは周辺地域に住み履歴不詳である。現在、北京中医学研究所蔵の『痧脹玉衡』の版本中にさえ、「秘伝」と名づけられているものがある。これらの「痧」のテキストは比較的理論の色彩は少なく、診断と実用をメインとしている。彼等はテキストで「痧

127 胡鳳昌、『痧症度針』「弁言」、1893年石印本(原刊は1873)、上海図書館蔵、pp.1a-1b.

128 訳者注。『急救痧症全集』は、『痧症文献整理』、pp.398-475に収載。友棠は、費山寿の字。

129 費友棠、『急救痧証全集』、上海、上海科学技術出版社、2000年(原刊は1883)。

130 汪欲濟、『痧脹撮要』、1918年汪民鉛印本、上海図書館蔵。

131 訳者注。フラクタルは、『日本国語大辞典』に「どのように分解してもその部分が元の全体と同じ形を備えていて、微分が不可能な図形。フランスの数学者マンデルブロー(B. B. Mandelbrot)がラテン語のfractas(破片・分割の意)をもとにつくった語。」とある。

132 祝平一「薬医不死病,仏度有縁人:明、清の医療市場、医事知識与医病関係」、『中研院近史所集刊』68、2010年、pp.19-23。

133 Charles Rosenberg,"Framing Disease:Illness,Society and History," pp.305-318.

症」と命名しているものを、一つの特異な疾病として、痧の症状を説明しており、以前のテキストの記載（古い医書に記載があること）を強調する。そのうえある地域ではかなり刮放療法が流行っており、そのため刮放が、「痧」の治療の特色となった。

痧症の治療書は刮放の重要性を強調するが、なおも病を経絡に分ける主流の医学概念にしたがって痧症を取り扱う。痧症の治療書の中でも普通は、処方が記載される。しかし痧症の治療書の記述からみると、刮放療法が「痧」の定義の手段とさえなっている。痧症がテキスト化される過程もまた、医学テキストの伝統が、一般庶民の知識を流用し吸収した一例である。刮放は医者がある症状を治療するための理に適った手段とすでに認められたにもかかわらず、周辺の医者がテキストを用い痧症の論理性を作り上げようとした点については、なお議論がある。

小結

ここまでが一章、二章の日本語訳である。

次回は、三章、痧之為疾：指稱與實體（痧の病とは：命名と実体）、四章、痧為疾乎？（痧は病気なのか）、五章、結語（結び）を日本語訳したいと考えている。

参考文献

- 嚴世芸主編、『中国医籍通考』、上海中医学院出版社、1990-1994年
王瑞祥 主編、『中国古医籍書目提要』、中医古籍出版社、2009年
呉文清 主編、『温病大成 4』、福建科学技術出版社、2008年
薛 清録、『中国中医古籍総目』、上海辞書出版社、2007年
創医学会学術部 編、『漢方用語大辞典』、療原、2007年
臧励穌 等編、『中国人名大辞典』、台湾商務印書館、1986年
松岡榮志 監修、『中国医学史レファレンス辞典』、白帝社、2011年
楊金生、王瑩瑩主編、『痧証文献整理与刮痧現代研究』、中国医薬科技出版社、2015年
李経緯 等主編、『簡明中医辞典（修訂本）』、中国中医薬出版者、2001年
李経緯[他]主編、『中医大辞典』、人民衛生出版社、2004年
李雲 編著、『中医人名大辞典』、中国中医薬出版社、2016年